

評価アウトプットイメージ表 (2. ニホンジカ個体群の保護管理)

資料1\_4

中期目標	短期目標	実施した取組	評価の視点	評価の材料		結果と考察	短期目標に対する評価	中期目標に対する評価
				内容				
ニホンジカ個体群の適正な生息密度への誘導・維持	①個体数調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個体数調整</li> <li>・捕獲手法の検討適用</li> <li>・適切なモニタリング手法の検討・実施</li> <li>・植生の回復に応じた目標生息密度の検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①捕獲手法と目標達成度</li> <li>②シカの生息密度の変化</li> <li>③植生(柵外)の変化</li> </ul>	生息密度の動向【資料1_5-1】	糞粒調査	調査開始時より見られたミヤコザサが生育する地域で生息密度が高く、ミヤコザサが生育しない地域で生息密度が低い傾向は生息密度の低下とともに均一化してきた。生息密度は目標値である5頭/km <sup>2</sup> に近づいているものの、未だ高密度の地域が存在する。	<p>生息密度指標の1つである糞粒法の結果によると、ニホンジカの平均生息密度は低減傾向にあり、暫定目標値である5頭/km<sup>2</sup>に近づきつつある。この生息密度の低減には、個体数調整による捕獲が一定の役割を果たした結果と考えられた。</p> <p>個体数調整による捕獲は麻酔銃、アルバインキャプチャー、Box Trap、装薬銃、くくりわな等、安全確保及びニホンジカの生息状況に応じて手法を選択し実施してきたが、近年は、くくりわなによりほぼ目標捕獲頭数を捕獲することができた。</p> <p>ニホンジカの年齢構成や栄養状態及び妊娠率などについては、個体数調整の影響による大きな変化は見られていない。</p> <p>現在の目標生息密度は個体数の低減を図るための目標であるため、今後の課題として、植生の回復と対応した目標生息密度を決定する指標を明らかにする必要がある。さらに、緊急対策地区全域における目標生息密度の設定と併せて、地域ごとのきめ細かい目標生息密度の設定をすることが重要であり、ニホンジカ行動圏調査結果等を活用し、効果的な個体数調整の実施を検討する必要がある。</p>	<p>糞粒法の結果によると、ニホンジカの平均生息密度は、低減傾向にあり、暫定目標値である5頭/km<sup>2</sup>に近づいてきた。調査地点によっては、10~20頭/km<sup>2</sup>を超える地点が東大台地域にいくつか存在するものの、暫定目標値である生息密度への誘導は進んできたといえる。今後も個体数調整を継続し、暫定目標値である生息密度への誘導を進めていく必要がある。</p> <p>ただし、自然植生への影響を軽減し回復を図るための、ニホンジカ個体群の適正な生息密度は明らかになっていないため、適正な生息密度について検討する必要がある。</p>
					ライトセンサス調査	東大台地域での観察数の減少が明確であり、糞粒法で確認された生息密度の低減を支持する結果であると考えられた。		
					区画法調査	区画法調査による近年の生息密度はほぼ横ばいであった。ただし、西大台におけるニホンジカの生息密度は高く、東大台で低い生息密度となり、西大台は生息密度の過去最高値を示した。他調査の結果を支持する結果であった。		
				行動把握【資料1_5-2】	GPSテレメトリー調査	冬期は個体ごとに異なる地域へ季節移動することが明らかになった。またミヤコザサ生育地を好んで利用すること、4~9月までの間は比較的狭い面積内で生活していることも明らかになり、生息密度低減を図っていく際の有効な情報になると考えられた。		

			個体数調整 【資料1_5-3】	捕獲	近年、くくりわなを用いたことにより、捕獲頭数が目標値に達するようになったが、個体数の増減に影響のある出産前の成獣メスを計画通りに捕獲できていない年度があり、成獣メスを選択的に捕獲することが課題である。ただし、くくりわなを用いても、春季に捕獲を実施することで、成獣メスの捕獲割合を高めることができる。また、ニホンジカの搬出が困難な場所や人目につきやすい場所で、如何に捕獲を実施するかが課題である。
			捕獲個体分析 【資料1_5-4】	年齢査定	オスについては幼獣及び成獣個体の捕獲割合がやや高く、一方メスは成獣個体の割合が低くなる傾向がみられた。
				栄養状態	栄養状態については、捕獲等の影響による明確な変化はみられなかった。
				繁殖状況	妊娠率は、平成20(2010)年度以降、比較的高い値で維持されている。
② 捕生保全対策	「森林生態系保全再生」に掲載 (・防鹿柵・剥皮防止用ネットの設置(東大台)・小規模防鹿柵(正木峠南西部の谷筋の疎林部に3基設置)・防鹿柵内自生稚樹の坪刈実験(正木峠防鹿柵No.5内(木佐貫先生)))	「森林生態系保全再生」に掲載	「森林生態系保全再生」に掲載	「森林生態系保全再生」に掲載	「森林生態系保全再生」に掲載
③ 生息環境の整備	大台ヶ原・大杉谷ニホンジカ保護管理連絡会議開催	より広域的な視点での保護管理に向けた検討ができたか	-	-	-

その他(環境省外の調査があれば活用。以下同様。)